

河沙魚

林芙美子

青空文庫

空は暗く曇つて、囂々と風が吹いていた。水の上には菱波が立っていた。いつもは、靄の立ちこめているような葦の繁みも、からりと乾いて風に吹き荒れていた。ほんの少し、堤の上が明るんでいるなかで、茄子色の水の風だけは冷たかった。千穂子は釜の下を焚きつけて、遅い与平を迎えかたがた、河辺まで行ってみた。——どんなに考えたところで解決もつきそうにはなかつたけれども、それかと云つて、子供を抱えて死ぬには、世間に対してぶぎまであつたし、自分一人で死ぬのは安いことではあつたけれども、まだ籍もなく産院に放っておかれている子供が、不憫でもあつた。

吹く風は荒れ狂い、息が塞りそうであつた。菱波立っている水の上には、大きい星が出ていた。河へ降りてゆく凸凹の石道には、両側の雑草が叩きつけられている。岸边へ出ると、いつもは濡れてぬるぬるしている板橋も乾いて、びよびよと風に軋んでいた。

窓ガラスのように、堤ぎわの空あかりが、茜色に柵引き光っていた。小さい板橋を渡つて、昏い水の上を透かしてみると、与平が水の中に胸にまでつかつて向うをむいていた。

「おじいちゃん！」

風で声がとどかないのか、渦を巻いているような水のなかで、与平は黙然と向うを向いたままである。口もとに手をやって乗

り出すような恰好かつこうで千穂子がもう一度、大きい声で呼んだ。ずうんと水に響くひびような声で、おおうと、与平がゆつくりこつちを振り返ふった。

「もうご飯だよッ」

「うん……」

「どうしたんだね、水の中へはいつてさ。冷えちまうじやないかね……」

与平はさからう水を押おしわけるようにして、左右に大きくからだ軀をゆすぶりながら、水ぎわに歩いて来た。棚引いていた茜色の光りは沈しずみ、与平の顔がただ、黒い獣けもののように見える。なまぐさい藻もの匂においがする。近間で水鳥が鳴いている。与平が水のなかに這はい入

りこんでいたのが、千穂子には何となく不安な気持ちだった。

「風邪をひくのだアよ。おじいちゃん。無茶なことしないでね……」

「網を逃がしてしまったで、探しとったのさ」

「ふん、でも、まだ寒いのに、無理するでないよ……」

「うん、——まっは起きてるのかえ？」

「起きてなさる」

「ふうん……えらい風だぞ、夜は風になるな」

ずぶ濡れになったまま、与平はがっしりした軀つきで千穂子の

前を歩いて行く。腿のあたりに、濡れたずぼんがからみついてい

た。裏口の生垣に咲いているこでまりの白い花の泡が、洗濯

物のように、風に吹かれていた。千穂子は走って、台所へ行き、

釜の下をのぞいた。火が燃えきっていた。あわてて松葉まつばと薪まきをくべると、ひどい煙けむりの中から炎ほのおがまいたって、土間の自転車の金具が炎で赤く光った。

千穂子は納戸なんどから、与平のシャツと着物を取って来た。濡れたものをすっかり土間へぬぎすてて、裸はだかで釜の前に来た。与平はまるで若い男のような軀つきである。千穂子は炎に反射している与平の裸を見て、誰だれにもなく恥はずかしい思ひだった。

「おじいちゃん、風邪ひくで……」

「うん、気持ちがいいんだよ」

与平は乾いた手てぬぐい拭ぬぐいで、胸から臍へそへかけてゆつくりこすった。

千穂子がかたづく以前から飼かっている白猫しろねこが、のっそりと与平

の足もとにたたずんでいる。小さい炉ろでは、鍋なべから汁しるが煮にえこぼれていた。与平はシャツを着て、着物を肩かたに羽織ると、炉端ろばたに上あぐらつて安坐あんざを組んで煙草たばこを吸った。人が変つたように千穂子が今朝けさ戻もどつて来てからと云うもの、むつつりしている。——今日きょうは戻つて来るか、明日は戻つて来るかと隆りゅう吉きちを待つ思いでいながら、いつの間にか半年はたったのだが、隣となり町まちの安造やすぞうも四日ほど前に戻つて来たと云う話を聞いた。すべては与平と相談の上で、何もかも打ちあけて隆吉に許しを乞こうより道はないと、二人の話はきまつているのではあつたけれども、与平が何となく重苦しくなっているのを見ると、千穂子はいてもたつてもいられない、腫はれものにさわるような気持ちだつた。千穂子は今は一日が長くて、

住み辛づらかった。姑しゅうとめの膳ぜんをつくつて奥おくへ持つて行くと、姑ぢのまつは薄目うすめを明けたまま眠ねむっていた。枕まくらもとへ膳ぜんを置き、「おかあさん、ご飯ごはんだよ」と呼んでみたけれど、すやすや眠ねむっている。千穂子はかえつてほつとして、そこへ膳ぜんを置き、炉端ろたんへ戻かえつて来た。

「よく眠ねむつてる……」

「うん、そうか、気分がいいんだろ……」

「おじいちゃん、そこに酒さけついてますよ」

炉すみの隅すみの煉瓦れんがの上に、酒さけのはいった小さい土瓶どびんが置いてある。

与平よへいは、汚よごれたコップを取とつて波々と濁どぶろく酒さけをついで飲のんだ。千穂ちほ子は油あぶら菜なのおひたしと、汁じゆを大おお椀わんに盛もつてやりながら、さつき、水みづの中なかへはいつていた与平よへいのころもちを考えていた。死し

ぬ気持ちであんな事をしていたのではないかと思えた。そんな風に考えて来ると涙が溢なみだあふれて来るのである。ざあと雨のような風の音がしている。もう、この風で、最後の桜さくらの花も散つてしまふであらう。千穂子は猫にも汁飯を少しよそつて、あがりっぱどんぶりなに井を置いてやった。

「伊藤いとうとか云う人の話はまだきまらねえのか……」

小さい声で、与平がたずねた。千穂子は不意だったので、吃びつく驚おどろしたように与平の顔を見た。いままでも、小柄こがらで瘦やせていた千穂子ではあつたけれども、子供を産んでしまうと、なおさら小さくなつたようで、与平は始めて、薄暗い燈火の下で千穂子の方を見た。伊藤と云うのは、千葉の者で、千穂子の子供もらを貰つても

いいと云つてくれる人であつたが、産婆さんばの話によると、もう少し、器量きりょうのいい赤ん坊あかぼうを貰もらいたいと云う事で、話が沙汰さたやみのようになつていたのであつた。千穂子の赤ん坊は月足らずで生れたせいか、小さい上にまるで、猿さるのような顔をしていて、赤黒い肌はだの色が、普通ふつうの赤ん坊とは違ちがつていた。赤ん坊は生れるとすぐ蟹糞かにくそをするのだけれど、まるでその蟹糞色のようななどす黒い肌であつた。——藁わらの上から、親切な貰もらい手があれば一番いいのである。産み月近くには、二人ばかり貰もらい手の口もあつただけけれど、いざ生れて、猿つこのような赤ん坊を見せられると、二人の貰もらい手は、もつと器量きりょうのいい子供をと云うことになつたのであろう。千穂子は日がたつにつれ気持ちあせが焦つて来た。このまま誰も貰もらい手

がないとなると、与平との相談も、もう一度しなおさなくてはならないのだ。与平も、赤ん坊の片づく話を待っていたのだけれども、千穂子の顔色で、うまく話が乗ってゆかなかつたと云うことをさとっていた。

「伊藤さんも、このごろ、少し、気が變つて男の子がいいと云うのさ……」

私の子供は器量が悪いから駄目^{だめ}だったのだとは云いづらかつた。乳もよく出るのではあつたけれども、どうせ手放す子供なら、早くした方がいいと云うので、生れるとすぐ乳は放してしまつた。そのせい^{せい}か、小さい軀は皺^{しわ}だらけで、瘦せた握^{にぎ}りこぶしをふりあげている恰好^{かっこう}は哀^{あわ}れで見えていられなかつた。親指を内側に、

しつかり握りこぶしをつくつているので、湯をつかわせる時には、握りこぶしのなかに、たもと袂ぐそのような汚れたものをつかんでいた。「やっぱり、金でもつけねえと駄目か……」

千穂子はふつと涙が突つきあげて来た。腰こしの手拭で眼めをこすつた。

隆吉が兵隊に行つて四年になる。千穂子との間に、太郎たろうと光こうき

吉ちと云う子供があつた。あとに残つた千穂子は、隆吉の父親の

与平の家に引きとられて暮くらすようになり、骨身をおしまず千穂子

は百ひやく姓しょう仕事を手伝つていた。そのままでゆけば何でもないの

であつたけれど……。千穂子は臆おく病びょうであつたために、ふつと

した肉体の誘惑ゆうわくを避けるさことが出来なかつたのだ……。一度、
軀を濡らしてしまえば、あとは、その関係を断ち切る勇気がなかつた。若い女にとつて、良人おっとを待つ四年の月日と云うものはあまりに長いのである。良人の父親と醜みにくいちぎりを結ぶにいたつては、
獣けものにもひとしいと云う事は、いくら無智むちな女でも知っているはずであるのに……。田舎いなかの実科女学校まで出た千穂子が、こうしたあやまちを犯し、あまつさえ、父との間に女の子供を生んでしまつたと云うことは哀かなしい運命に違いない。子供がまだ腹にあるうちに終戦になつた。復員の兵隊を見るたびに、千穂子も与平も罪のむくいを感じないではいられなかつた。姑のまつは中風ちゆうふうしよ症うで、もう五年ばかりも寝ねたきりである。家のものの眼を怖おそれ

る事はなかつたけれども、千穂子は、ぶざまな姿で良人に会う事が身を切られるように辛かった。世の妻たちは、一日も早く良人の復かえりの早いのを祈いのっていると云うのに……、千穂子は、一日も遅く良人が帰って来ることを祈っていた。早く身二つになつてから、良人の前に罪を詫わびたいと思つたのだ。——みよう妙なことには、遠きもの日々にうとして、日夜、いっしょ一緒に暮している与平へ対する愛情の方が、いまでは色濃こいものとなつていただけに、千穂子はその情愛なやに悩むのである。隆吉の姿がいまではぼやけてしまつて、風船のように、虚空こくうに飛んでしまつている。——与平も千穂子も寅年とらとしであつた。二匹ひきの雌雄しゆうの虎とらがううと唸うなりながら、一つ檻おりのなかで荒れ狂つていような思い出が、千穂子の軀を熱く煮

えたぎらせた。若い男とささやきあうような口先で、秘密をつくるようなことはしなかつた……。ただ、偶然ぐうぜんに、讐敵しゅうてきに会つたような、寅年の二人の肉体が呼びあつたのだ。田の字づくりの四部屋へやばかりの家で、北の一部は板の間の台所。台所の次は納戸で、ここには千穂子達の荷物が置いてあつた。東の六畳じように始め、千穂子たちは寝ていたのだけれども、朝晩の寝床ねどこのあげおろしに時間がとれるので、いつの間にか、千穂子達は万年床のまま置くにふさわしい、与平達の六畳の寝床を使うようになっていた。高い窓が一つあるきりで、その窓ガラスも茶色にくもつてまるきり戸外は見えないまでに汚れてしまつている。襖ふすまをたてると昼間でも黄昏たそがれのように暗い部屋だつた。押入れのはめこみの中の仏ぶつ

壇つだんの前に、姑のまつが寝たつきりであった。その次に与平の寝床、真中まんなかは子供二人の寝床。それでもう狭い部屋せまはいっぱいになつてしまふ。夏も冬も、千穂子は子供達の後から寝床へはいりこんで眠つた。七ツになる太郎は、時々、朝、大きい声で、「おじいちゃん、昨夜、おれの寝床へはいりこんで来たよ。寝ぞう悪いんだなあ……」と笑つた。四ツになる光吉も片言で、「おじいちゃん、怖い夢こわゆめみたのかい？」と聞いている。千穂子は子供の前にあか赧あかくなつた。与平はぷつととして子供からそっぽを向いた。――与平も苦しまないはずはないのだ。毎晩、どんな工面くめんをしても酒を飲むようになっていた。だけど、酒を飲むと人が變つたように与平は感傷的になり、だらしなくなつていた。酒に酔よつて歸つ

た与平に対して、千穂子が怒おこつてぷりぷりしていると、頻しきりに頭をこすりつけてあやまるのだ。深酒をした夜など与平の気持ちは乱れて、かつと眼を開いているまつの前でも与平は千穂子に泣くようにしてあやまるのである。与平にとっては、嫁よめの千穂子が不憫かわいで可愛かわいくて仕方がないのであつた。隆吉に別れている淋さびしさが、千穂子との間にだけは、自分の淋さびしさと同じように通じあつた。千穂子も淋さびしくて仕方がないのでと、まるで、自分の娘むすめを可愛かわいがるようになしぐさで、千穂子の背中をさすり、子守唄こもりうたを歌なぐさつて慰なぐさめてやりたくなるのである。その可愛かわいさがだんだん太ふと々ぶとしくなり、しまいには食い殺ころしてしまいたい気持ちになるのも酒の沙汰さただけとは云えないのだ……。器量のいい女ではなかつたけれども、

餅もちのようにしんなりした肌をしていた。よく光る眼をしていた。眉まゆは薄く、顔つきもまんまるだったが、茶色の眼だけは美しかった。髪かみも赤つ毛で縮れていた。K町の実科女学校に行っている頃ころ、与平は千穂子にたびたび道で出逢であった。ちつとも目立たない娘であつた。そうした無関心でいた娘が、隆吉の嫁になつて来てから、今日いたに到るまでの事を考えると、与平は偶然な運命と云うものを妙なものだと思つた。深酒に酔つて、しばらくごうごうといびきをたてて眠ると、夜中になつて、与平は本能的に何かを求めた。暗がりの中で、まつが眼を覚ましていようといまいと、与平はかまつていられないのだ。考える事と、行動力は別々であつた。皮ひ膚ふを一皮むいてしまいたいような熱っぽい感じなのである。一日

一日罪を贖あがなつてゆく感じだった。夜になると、千穂子へ対する哀れさ不憫さの愛が頂点に達してゆくのだった。昼間、決断力が強くなっている日ほど、夜になると、不逞ふていきわまる与平の想像がせきを切つて流れて行つた。相手が動物になつてしまうと、もう、与平にとつて、哀れでも不憫でもなくなる。意識はひどくさえざえとして来て、自分で自分がしまいには不愉快ふゆかいになつて来るのだ。自分の寢床へ戻つて来ると、息子むすこへ対してしみじみと自責の念が湧わき、千穂子と云う女が厭いやになつて来るのであつた。千穂子に限らず、あらゆる人間が厭いやになつて来るのであつた。その厭だと思ふ気持ち、前よりもいつそう人づきあいの悪い老人になり、千穂子が荒川区のある産院に子供を産みに行つてからは、与平は釣つ

りばかりして暮していた。釣りをしている時だけが愉^{たの}しみであった。与平だけでは二人の子供のめんどうは見られないので、千穂子は与平に頼^{たの}んで、葛^{かつしか}飾にある、自分の実家の方に二人の子供をあずけた。母と姉とが、このごろ野菜の闇^{やみや}屋になつて暮していた。姉の富^{ふさこ}佐子は、結^{けっこん}婚していたけれど、良^{にっか}人が日華事変の当時^{しゅつせい}出^{しゅつ}征^{せい}して戦死してからと云うもの、勝気で男まさりなところから、子供のないままに、野菜荷をかついで東京の町々へ売りに行つて、いまでは小金も少しは貯^{たく}め込^こんでいた。野菜がない時は、静^{しずおか}岡まで蜜^{みかん}柑を買いに行つたり、信州までリンゴを買いに行つたりした。終戦になつてからも、ずっと商売はつづけていた。男の運び屋のように、たくさんの荷を背負つては来なかつたが、

リンゴも三度に一度は取りあげられると、浮ぶ瀬がないので、味噌とか、ゴマのようなものを混ぜて買って来ては、結構利潤がのぼっていた。

富佐子は久しく、千穂子に逢う事がないので階川の家の様子も判らなかつたけれども、母親の梅は、様子の変つて来ている千穂子と与平の關係をそれとなく感じている様子だった。与平が怒りつぽい男なので、ただ、そんな話にふれる事をさけているきりであつたが、心のうちでは、梅は娘の身の上をひどく案じていた。

千穂子は女の子を産んだ。

肉親の誰一人にも診^みててもらうでもなく、辛い難産であった。太郎や光吉の時も、このような苦しみようはしなかったと思うほどな辛さであった。——階川の家には、隆吉と与平の自転車が二台あったのを、与平は自分のを売って金に替^かえて、千穂子に持たせた。土地もない小百姓だったので、現金も案外持つてはいなかったし、与平にとっては、自分の貯^{たくわ}えの中から、お産の金を出す^{ぬす}と云う事は、隆吉に顔むけにならない気持ちで、自分の自転車は盗^{ぬす}まれた事にすればよいと思つていたのだ。

女の子供が生れたと聞いても、与平は別にうれしくもなかった。隆吉の下に霜^{しもえ}江と云う娘があつたけれど、十一の時に肺^{はいえん}炎で死なせてしまった。いま生きていれば、二十三の娘ざかりである。

与平は灰々ほのぼのといい気持ちに酔つて来た。やがて隆吉が戻つて来るといふ事が少しも不安でなくなり、慰めでさえあるような気がした。早く逢いたいと思つた。ラジオで聞く、リバティ型という船に乗っている、兵隊姿の隆吉のおもかげが浮んで来た。千穂子との、狂つた生活も、いまではすっかり落ちつくところへ落ちついている……。だが、何事もひしかくしにして済まされるものではあるまいと思つていた。そう思つて来ると、与平はずしんと水底に落ちこむような孤独こどくな気持ちになつて来た。酒のせいか、さつきほど、思いつめた気持ちにはなれなかつたが、もう少し、呼んでくれる千穂子の声がしなかつたら、あの風の中に、河へはいつたまま与平はそのまま網と共に、自分も流される氣でいたの

だ。

水の中へ少しずつはいつてゆくと、寒さもかえつて判らなかつたし、水の上は菱波立つていながら、水の底は森々とゆるく流れてなまぬるかたつた。くいなのような鳥の声が、ぎやあと遠くに聞えているのも耳についていた。与平は一步ずつゆるく川底にはいつてゆきながら、眼をすえて水の上を眺^{なが}めていた。石油色のすさびた水の色が、黄昏のなかに少しずつ色を暗く染めていった。水しぶきが冷たかつた。そのくせ、河明りの反射が、まるで秋のようにさえざえしていた。

「どの位、金をつけりやいいのだえ？」

与平が引つこんだ眼をぎよろりと光らせた。さて、いくらつけ

たらよいかと問われて、千穂子は、このごろの物価高の相場を吊りあわせる金銭の高が云えなかつた。こうした不幸な子供の貰い手には、金が目当てで、筋のよい子なら、一万円もつけるのもあるだろうけれど、普通に云つても、千円や、二千円はつけなければならぬのだ。

「新聞に出してもらつたか？」

「ええ、一度出してもらつたんですけど、てんからなんですよ。虫眼鏡むしめがねでみるような広告が、新しい新聞で八拾円なんですものね」

千穂子は心のうちで、もう一度、伊藤さんに頼んでみようと思つた。心は焦りながら、そのくせ、一日しのぎで、千穂子は上の

男の子達よりも不憫がまして来ているのである。貰われてゆけばすぐ死にそうな気がした。自分の勝手さだけで、子供をなくしたくない執しゅうちやく着やくが強くなり、今朝、産院を出て来たばかりなのに、さつきから、赤ん坊の事が気にかかって仕方がないのだ。千穂子のもう一つの考えの中では、姉に打ちあけて、姉の子供にしてもらいたかった。

「いいんだよ。私が勝手に何とか片をつけるもん、おじいちゃん
は心配せんでもいいのよ……」

与平はコップを持っていた手を中ちゆうと途でとめて、じつと宙を見
ていた。大きい耳がたれさがって老いを示していたが、まだ、狭
い額には若々しい艶つやがあった。白毛まじりの太い眉の下に、小さ

い引つこんだ眼が赤くただれていた。

「何とかなるで……金の工面をした方がよかろう？」

「うん、だけど、これ、私の考えだけどねえ、私、姉ねえさんに話してみようかと思うんだけど、どうでしょう……。そして、隆吉さんが戻って来る前に、私、女中でも何でもして働きに出ようと思ってるんだけど……」

「ふん、太郎と光吉はどうするんだえ？」

太郎と光吉の事を云われると、千穂子はどうにも返事が出来ないのだ。新しい嫁を貰ってもらうわけにはゆかないものだろうか
と、千穂子は心の底で思うのだった。

ちなまぐさ
血 腥

いことにならなけ

ればよいがと云う気持ちと一緒に、隆吉が思いきりよく、新しい

嫁を選んでくれればいいと云った様々な思いが、千穂子の頭の中を焙^{あぶ}るように弾^はせているのだ。

隆吉からは同情的な施^{ほどこ}しを受けてはならないと思つた。殴^{なぐ}るか、蹴^けるか、どんなにひどい仕打ちをされてもかまわないと思うのである。自分と云う性根のない女を、思いきり虐^{さい}なんでもらわなければならぬような気がした。そのくせ、千穂子は与平を憎^{ぞう}悪^おする気持ちにはなれなかつた。俎^{まな}板^{いた}の上で首を切られても、胴^{どう}体^ただけはびくびく動いている河沙魚^{かわはぜ}のような、明瞭^{はつき}りとした、動物的な感覚だけが、千穂子の脊筋^{せすじ}をみみずのように動いているのだ。

風が弱まり、トタン屋根を打つ雨の音がした。なまあたたかい

晩春の夜風が、どこからともなく吹き込む。麦ばかりのような黒い飯をよそつて、千穂子は濁酒を飲んでゐる。与平のそばで、ぼそぼそと食べはじめた。

風のむきで河の音がきこえる。与平は、空からになつたコップを膳の上に置いて、ぽつねんと、井をなめてゐる猫を見ていた。

「おじいちゃん、私、ご飯を食べたからかえりますよ」

「うん……」

「変な気をおこさないで下くださいよ。おじいちゃんがそんな気を起すと、私だつて、じつとしてはいられないもの……」

与平は眼をしょぼしょぼさせていた。薄暗い電気の光りをねらつて、かげろうのような長い脚あしの虫が飛びまわっている。——与

平が五十七、千穂子が三十三であつたが、お互いは、まるで、無
心な子供に近い運命しか感じてはいないのだろう……。二人とも、
ただ、隆吉だけを恐ろしいと思うだけである。そのくせ、隆吉に
対する二人の愛情は信しんこう仰こうに近いほど清らかなものであつた。

まつが、起きたような気配けはいだったので、千穂子は箸はしを置いて奥
の間へ行つた。暗い電気の下で、ぶるぶる震ふるえる手つきで、飯を
ぼろぼろこぼしながらまつは食事をしていた。

「おかあさん、起きたの知らなかつたんだよ」

甲斐かいがい甲斐がいしく膳を引きよせて、千穂子は姑の口へ子供へするよ
うに飯を食べさせてやつた。——隆吉は、千穂子より一つ下で世
間で云う姉女にようぼう房であつたが、千穂子は小柄なせい、年より

は若く見えた。実科女学校を出ると、京成電車の柴又しばまたの駅で二年ばかり切符きっぷ売りをしたりした事もある。隆吉にかたづく二十五年の年まで浮いた事もなく、年をとつても、てんから子供のようにななりふりでいた。

隆吉との夫婦ふうふうなか仲は良かった。隆吉は京成電車の車掌しやしようをしていたが、それも二三年位のもので、あとはずっと、与平に手伝つて、百姓をしたり、土地売買のブロオカアのような事をして暮っていた。中学を途中でやめた、気性の荒い男だったが、さつぱりした人好きのされる性質で、千穂子よりは二つ三つ老ふけて見えた。背の高い、ひよろひよろしているところが、弱そうに見えたけれど、芯しんは丈夫じょうぶで、歩兵にはもつて来いだと云う人もあつた。

千穂子は、その夜泊とまった。

ある翌る日、千穂子が眼をさますと、もう与平は起きていた。うらうらとした上天気で、棚引くような霞かすみがかかり、堤の青草は昨夜の雨で眼に沁しみるばかり鮮あざやかであった。よしきりが鳴いていた。

炉端の雨戸も開け放されて気持ちのいいそよ風が吹き流れていた。与平は炉端に安坐を組んで、銭ぜにかんじょう勘定をしていた。いままで、かつて、そうしたところを見たこともなかっただけに、千穂子は吃驚だまして、黙だまって台所へ降りて行った。

「おい……」

与平が呼んだ。千穂子が振り返ると、与平はむつつりしたまま札さつを数えながら、

「今日、これだけ持って行って、よく、頼んでみな……」

諸いもを売ったり、玉子の仲買いをしたり、川魚を売ったりして、少
しずつ新円を貯めていたのであろう、子供が幼稚園ようちえんにさげて
ゆく弁当入れのバスケットに、まだ五六百円の新円がはいって
いた。

「千円で何とかならねえか、産婆さんに聞いてみな……貧乏びんぼうな
ンだから、これより出せねって云えば、どうにかしてくれねえも
のでもねえぞ……」

「ええ、これから行って、よく相談します」

千穂子は髪ふりみだしたまま、泣きそうな顔をして、モンペの紐ひもで鼻水を拭ふいた。涙が出て仕方がなかった。中国にいる隆吉のかえりも、もう間近であろうと云う風評である。千穂子は、産院へ戻る前に、姉の富佐子に打明けて相談をしてみたかった。どうせ、あんな赤ん坊に貰い手はないとあきらめるより仕方がないのだ……。犬猫を貰つてもらおうように簡単な訳にはゆかない。器量のいい赤ん坊でなかった事が不幸ではあつたけれど、千穂子自身は、生れた赤ん坊に、一ヶ月近くもなじんで来ると、器量なぞのよしあしなぞ親の慾目よくめで考える事も出来なかつた。ただ、不憫がまずばかりだったし、与平に一眼だけ見せたくてたまらなかつた。どこかへ貰われてゆく前に、一眼だけ、与平に見せて抱だいてもら

いたかつたのだ。

千穂子は台所へ降りて、竈かまどに火をつけて、すいとんをつくつた。

裏口へ出ると、米をまいたように、こでまりの花が散り、つつじの赤い花がむらがつて開いていた。霞立つたような河の水が、あさぎ色にあたたかく明るんで、堤防の下を行く子供達の賑にぎやかな

声があった。千穂子は、太郎たちの事を思い、切なかつた。家を飛び出す事も出来なければ、死ぬのも出来ないのも、みんな子供達のためだと思つと、千穂子はどうしようもないのである。頭が混乱してくると、千穂子は、軽い脳貧血のようなめまいを感じた。

食糧しよくりようを風呂敷包ふろしきづつみにして、千円の金を持って千穂子は産院

に戻つて来たが、赤ん坊はひどい下痢げりをしていた。産婆の話によ

ると伊藤さんは他から、器量のいい二つになる赤ん坊を貰ったと云う事であつた。千穂子はがっかりしてしまった。産院に千円の金をあずけて、三日目にまた与平のところへ相談に戻つて来たが、与平はひどく機嫌きげんをそこねて、いつとき口も利きかなかつた。

「これは運だから仕様がなけれど、当分、貰い手がつくまで、あずかつてもらつておこうと思ふンだけど、一度、おじいちゃんにも聞いてみようと思つて……私だつて、ただ、ぶらぶらしてるンじゃないンですよ。困つちやつたンだモン」

「昨夜、富佐子が来て、太郎たち引取つてもらいてえと云つて来たよ」

「あら、そうですか……もう二ヶ月以上にもなりますからねえ……」

…男の子は手がかかるしねえ」

与平は筍たけのこを仕入れて来たと言つて、これから野菜と一緒にリヤカアで、東京の闇市やみいちへ売りに行くのだと支度したくをしていた。

「おい、隆吉が戻つて来たぞ……」

ぽつんと与平が云つた。

千穂子のはつとして眼をみはつた。

「手紙が来たの？」

「うん、佐世保から電報が来た」

与平はもう一日しのぎな生活だったのだ。千穂子は気が抜ぬけたような恰好で、縁側えんがわに腰をかけた。表口へ出る往来ぞ添いの広場に、石材が山のように積んである。千葉県北葛飾郡八木郷村村有

石材置場と云う大きい新しい木札きふだが立てられた。千穂子は腰かけたなり、その木札の文字を何度も読みかえしていた。その墨すみの文字が、虫のように大きくなったり縮んだりして来る。長閑のどかによきりが鳴いている。

「おじいちゃん。隆さん、いつ戻るの？」

「明日あたり着くんだろう……」

色の黒い商人風な男が、玉子はないかと聞きに来た。与平は顔なじみと見えて、部屋から玉子の籠かごを出して来ると、玉子を陽ひに透かしては三十箇こばかり相手の籠に入れてやった。男は釣銭つせんはいらないと云つて、百円札を置いて行つた。その男の後姿を見て、千穂子は何と云う事もなくぞつとするようなものを感じた。死神

とはあんなものではないかと思えた。片耳が花の芯のように小さく縮まつてしまつて、耳たぶがなかつたのだ。

「ああ、気持ちの悪い男だね……」

千穂子は立つて行つて、しばらく男の後姿を眺めていた。与平はやがて支度が出来たのか、隆吉の自転車にリヤカアをくくりつけて、「夜にやア戻つて来る」と云つて出掛^でけて行つた。

千穂子は与平が出て行くと、裏口へまわつて、奥の間へ上つた。まつは、不恰好な姿で、這うようにしておまるをかたづけしていた。「おしつこですか？」

もう用を足したと見えて、まつはものうそうに首を振っている。痩せて骨と皮になつていたけれど、まだまだ生命力のあると云つ

た芯の強そうな様子があつた。

「おばあちゃん、隆吉さんが戻つて来ますよッ」

千穂子がまつの耳もとでささやくと、表情の動かないまつは、じいっと千穂子の眼をみつめていた。千穂子はみつめられて厭な気持ちだった。隆吉が戻つて来れば、もう、いっぺんにこの静かな河添いの生活から切り離はなされてしまうのだと淋なしかった。千穂子はたまらなくなつて裏口へ出て行つた。半晴半曇やわらかの柔い晩春の昼の陽が河の上に光りを反射させている。水ぎわに降りて行つた。もう、追いつめられてしまつて、どうにもならない気持ちだった。「死ぬッ」千穂子は独りごとを云つた。死ねもしないくせに、こころがそんな事を云うのだ。肉体は死なないと云う自信がありな

がら、弱まった心だけは、駄々をこねているみたいに、「死ぬツ」と叫んでさけいる。

四圍あたりは仄々と明るくて、どこの畑の麦も青々とのびていた。

苔こけでぬるぬるした板橋の上に立つて、千穂子は流れてゆく水の上を見つめた。藁屑わらくずが流れてゆく。いつ見ても水の上は飽あきなかつた。この江戸川えどの流れはどこからこんなまんまに水をたたえて漫々と流れているのだろうと思うのだ。——薄青い色の水が、こまかな小波さざなみをたてて、ちやぷちやぷと岸の泥どろをひたしている。広い水の上に、尾おの青い鳥が流れを叩くようにすれすれに飛び交っていた。後の堤の上を、自転車が一台走って行った。千穂子はさっきの、耳のない男の後姿をふっと思ひ出している。

どうしても、死ぬ気にはなれないのが苦しかった。本当に死にたくはないのだ。死にたくないと思うとまた悲しくなつて来て、千穂子はモンペの紐でじいつと眼をおさえた。全速力で何とかしてこの苦しみから抜けて行きたいのだ……。明日は隆吉が戻つて来る。嬉うれしくないはずはない。久しぶりに白い前歯の突き出た隆吉の顔が見られるのだ。いまになつてみれば与平との仲が、どうしてこんな事になつてしまつたのか分わからない……。自然にこんな風にもつれてしまつて、不憫な赤ん坊が出来てしまつたのだ。――長い事、橋の上に蹲しゃがんでいたせいか、ふくらつぱぎがしびれて来た。千穂子は泥の岸へぴよいと飛び降りると、草むらにはいりこんで誰かにおじぎをしているような恰好で小用を足した。い

い
気
持
ち
で
あ
っ
た
。

（昭
和
二
十
二
年
一
月
）

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 林芙美子」筑摩書房

1992（平成4）年12月18日第1刷発行

底本の親本：「現代日本文学大系 69 林芙美子・宇野千代・幸

田文集」筑摩書房

1969（昭和44）年

初出：「人間」

1947（昭和22）年1月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年11月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

河沙魚

林芙美子

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>